

セルバンテスの『勇ましいスペイン人』における ムスリムの表象

三 倉 康 博

(受付 2015年10月29日)

1. は じ め に

ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ (Miguel de Cervantes Saavedra, 1547–1616) の戯曲『勇ましいスペイン人』(*El gallardo español*) は、スペインとイスラーム世界の間を描いた彼の多くの作品の一つであり、1615年出版の戯曲集『いまだ上演されたことのない新作コメディア 8編と新作幕間劇 8編』(*Ocho comedias y ocho entremeses nuevos, nunca representados*) に収録されている。執筆時期は、今日最も説得力があるとみなされているジャン・カナヴァッジョの説によれば、セルバンテスがマドリッドに居住していた晩年の1606–1615年とされる¹。

この戯曲は、当時スペイン領であった、北アフリカの城塞都市オランとその外港マサルキビル、およびその周辺地域を舞台としている。梗概を紹介すると、オスマン帝国支配圏に属するアルジェが派遣した遠征軍をオラン守備隊が撃退した1563年の攻防戦²を背景として、オラン守備隊の兵士ドン・フェルナンド・デ・サアベドラ (don Fernando de Saavedra) を中心に物語が展開する。自分が求婚している有力なモーロ人³女性アルラハ (Arlaxa) に、その武勇の名声が北アフリカにとどろくドン・フェルナンドと決闘し生け捕りにして連れてくることを要求されたモーロ人戦士のアリムセル (Alimuzel) は、ドン・フェルナンドにオラン城外での決闘を挑む。オランに対する脅威が迫るなか、ドン・フェルナンドは、決闘に応じるために、周囲の制止を振り切ってオランを出奔する。アリムセルの恋敵ナコル (Nacor) が策謀をめぐらしアリムセルを決闘場所から引き揚げさせてしまったので、ドン・フェルナンドとアリムセルは城外で入れ違いになり、決闘は成立しないが、アリムセル、アルラハとの接触の機会を求めるドン・フェルナンドは、アルラハが率いる部族の宿営地に偽

- 1 Jean Canavaggio, *Cervantès dramaturge. Un théâtre à naître*, Paris: Press Universitaires de France, 1977, pp. 22, 25.
- 2 オランは1556年と1563年の2回、オスマン勢力による大規模な攻撃を経験している。その詳細と同時代における反響については、María José Rodríguez Salgado, “‘El león animoso entre las balas’: Los dos cercos de Orán a mediados del siglo XVI”, in Miguel Ángel de Bunes Ibarra & Beatriz Alonso Acero (eds.), *Orán. Historia de la Corte Chica*, Madrid: Polifemo, 2011, pp. 13–54を参照。
- 3 「モーロ人」の概念については、本稿20頁を参照。

名を用いて投降して潜入する。アルラハを自分が手に入れる条件でナコルが案内役となり、オランの兵士たちが略奪目的で宿営地を襲撃したさいには、ドン・フェルナンドはモーロ人の側に立って戦う。しかし最後は、アルジェからの遠征軍に攻撃され窮地に陥ったオランの救援に駆けつけ、その防衛に大きな貢献をなす。戦いのあと、ドン・フェルナンドは許され、彼への思いを募らせスペインから北アフリカに渡ってきた女性マルガリータ (Margarita) とドン・フェルナンド、アルラハとアリムセルの二組の男女がそれぞれ結婚を誓い合って、劇は終わる。

この戯曲は、セルバンテスの諸作品のなかでは、かつて最も評価が低く、かつ注目されることの少なかつたものの一つだが⁴、セルバンテス戯曲の再評価⁵に伴って今日までに、危機にさらされたオランを防衛する義務を一時放棄して、個人的名誉をかけた決闘のために出奔するドン・フェルナンドの行動に注目しながら、多数の重要な先行研究が現れている。ドン・フェルナンドがキリスト教のイスラームに対する優越を体現しているとしたもの⁶、ドン・フェルナンドの名声と実際の行動の乖離を指摘したもの⁷、真実とフィクションの複雑な関係を分析したもの⁸、主人公ドン・フェルナンドの個人的名誉と軍人としての公的な義務の衝突、そして両者の最終的な調和を論じたもの⁹、この戯曲の騎士道物語的側面を論じたもの¹⁰のほか、とりわけ興味深い先行研究として、この戯曲がレコンキスタ時代のイベリ

4 セルバンテス戯曲の先駆的研究である Armando Cotarelo y Valledor, *El teatro de Cervantes. Estudio crítico*, Madrid: Tipografía de la Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos, 1915, pp. 259–296 および Robert Marrast, *Miguel de Cervantès dramaturge*, Paris: L'Arche, 1957, pp. 56–61 でも『勇ましいスペイン人』を取り上げているが、凡作という評価を下している。

5 この再評価においては、Canavaggio, *op. cit.* が大きな役割を果たした。

6 Joaquín Casaldueiro, *Sentido y forma del teatro de Cervantes*, Madrid: Gredos, 2ª ed., 1974 (1ª ed., Madrid: Aguilar, 1951), pp. 31–55; Frederick A. De Armas, “Los excesos de Venus y Marte en *El gallardo español*”, in Manuel Criado de Val (ed.), *Cervantes. Su obra y su mundo. Actas del I Congreso Internacional sobre Cervantes*, Madrid: EDI-6, 1981, pp. 249–259.

7 William A. Stapp, “*El gallardo español*. La fama como arbitrio de la realidad”, in Manuel Criado de Val (ed.), *Cervantes. Su obra y su mundo. Actas del I Congreso Internacional sobre Cervantes*, Madrid: EDI-6, 1981, pp. 261–272; Gethin Hughes, “*El gallardo español*: A Case of Misplaced Honour”, *Cervantes*, 13.1 (1993), pp. 65–75.

8 E. Micahel Gerli, “Aristotle in Africa: History, Fiction, and Truth in *El gallardo español*”, *Cervantes*, 15.2 (1995), pp. 43–57; Eric J. Kartchner, “Dramatic Diegesis: Truth and Fiction in Cervantes's *El gallardo español*”, *Yearbook of Comparative and General Literature*, 47 (1999), pp. 25–35; Lourdes Albuissech, “«Mezclar verdades con fabulosos intentos»: metateatro y aporía en *El gallardo español* de Cervantes”, *Anales Cervantinos*, 36 (2004), pp. 329–344.

9 Florencio Sevilla Arroyo & Antonio Rey Hazas, “Introducción”, in Miguel de Cervantes Saavedra, *El gallardo español. La casa de los celos (Obra completa 13)*, Madrid: Alianza, 1997, pp. XII–XXX. また、詳細ではないが、Edward H. Friedman, *The Unifying Concept: Approaches to the Structure of Cervantes's Comedias*, York, South Carolina: Spanish Literature Publications Company, 1981, pp. 29–31 は、ドン・フェルナンドとマルガリータの二人の名誉の一時的喪失と回復という観点で分析をおこなっている。

10 Stanislav Zimic, *El teatro de Cervantes*, Madrid: Castalia, 1992, pp. 87–117. シミッチはドン・フェルナ

ア半島におけるイスラームとキリスト教のあいだの境界地帯 (frontera) にみられた精神を受け継ぎ、ドン・フェルナンドの行動を通して、宗教の違いを超えた相互理解を描いていると論じているマリア・ソレダ・カラスコ・ウルゴイティとエンカルナシオン・サンチェス・ガルシアの研究が挙げられる¹¹。

本稿はカラスコ・ウルゴイティとサンチェス・ガルシアの示した研究の方向性を支持している。しかしながら、先行研究全般について言えることだが、この作品のムスリム登場人物たちに対する、歴史背景を踏まえた綿密な分析は、今までなされていない。

セルバンテスはイスラーム世界に対する深い知識と関心の持ち主であり、とりわけ北アフリカについて言えば、アルジェで5年間の虜囚生活 (1575–1580年) を送り、1581年には、おそらくは諜報活動のために王命を受けて、短期間オランに滞在している¹²。『勇ましいスペイン人』でも、同時代のオラン守備隊と周辺ムスリム諸集団の複雑な関係を、歴史的現実を踏まえて、丹念に描写している。しかしながら、先行研究においては、この戯曲に登場するムスリムたちの多様性は注目されてこなかった。本稿では、その空白を埋めるべく、16世紀のスペイン領オランと周辺ムスリム諸集団の関係に関する歴史背景を概観したあとで、この戯曲におけるムスリム人物たちの描写を分析し、それが作品全体の意味とどう関連しているのかを考察し、この戯曲に新たな光を当てたい。

2. 「戦争のモーロ人」と「平和のモーロ人」

16–17世紀のスペインでは、イベリア半島内におけるムスリムに対するキリスト教徒の国土回復運動すなわちレコンキスタ——1492年にグラナダが陥落して完結した——以来の、イスラーム世界に対する「聖戦」が、公的なイデオロギーとなっていた。当時のスペインで

ンドの行動については、個人的名誉と集団的義務が最後に調和するものの、それは幸運の産物にすぎず、作者が彼の行動を無条件に支持してはいないと指摘している (*ibid.*, pp. 114–116)。

- 11 María Soledad Carrasco Urgoiti, “El gallardo español como héroe fronterizo”, in Antonio Bernat Vistarini (ed.), *Actas del Tercer Congreso Internacional de la Asociación de Cervantistas, Cala Galdana, Menorca, 20–25 de octubre de 1997*, Palma: Universitat de les Illes Balears, 1998, pp. 571–581; Encarnación Sánchez García, “La frontera africana hispánica y *El gallardo español* de Miguel de Cervantes”, in Ismet Terki-Hassaine, Emilio Sola Castaño, Alejandro R. Díez Torre & Manuel Casado Arboniés (eds.), *Las campanas de Orán, 1509–2009. Estudios en homenaje a Fatma Benhamamouche*, Alcalá de Henares: Universidad de Alcalá, 2012, pp. 363–376. 詳細ではないが同様の解釈を示した研究として、Albert Mas, *Les turcs dans la littérature espagnole du Siècle d’Or (Recherches sur l’évolution d’un thème littéraire)*, 2 vols., Paris: Centre de Recherches Hispaniques, 1967, I, pp. 323–324がある。カナヴッジョも、この戯曲が北アフリカでのキリスト教徒とムスリムの共存を反映し、二つの文明の関係について多義的な見方を示していると論じている (Canavaggio, *op.cit.*, p. 393)。
- 12 セルバンテスの伝記は多数出版されているが、よくまとまったものとして、Donald P. McCrory, *No Ordinary Man: The Life and Times of Miguel de Cervantes*, London: Peter Owen, 2002 を挙げたい。セルバンテスのアルジェ虜囚体験については pp. 73–94, オラン渡航については pp. 100–102 を参照。

は、歴史記述、宗教書、文学作品など様々な種類のテキストの書き手たちの多くが、オスマン帝国を中心とする地中海イスラーム世界と対峙するキリスト教世界の主導的地位に自国を位置づけ、反イスラーム、反ムスリムを唱え、「偽りの宗教」イスラームに対する「唯一真正な宗教」キリスト教の精神的優越を主張していた¹³。しかし、1509年にスペインに占領され対イスラームの最前線に位置した城砦都市オランでは、そのような公的言説とは必ずしも親和性のない形で、ムスリムとの多様な関係が築かれていた。この点を、主にベアトリス・アロンソ・アセロの詳細な研究¹⁴に沿って概観したい。

オランのスペイン守備隊は、オスマン帝国の支配下でありスペインやイタリア諸邦の船舶や国土を攻撃する私掠船団の拠点であった北アフリカの諸都市、とりわけその最大のものであり、スペイン人にとって深刻な脅威と認識されていたアルジェ¹⁵を牽制する役割を担っていた。それゆえ、アルジェの支配階層を構成した「トルコ人」(turcos: 私掠船団や精鋭歩兵部隊イエニチェリの中核を担った、アナトリア出身のトルコ語を母語とするムスリムやヨーロッパ出身改宗ムスリムの総称)とオラン守備隊のあいだには、明確な敵対関係があった¹⁶。

しかし、海を隔てたスペイン本土から十分な補給がおこなわれず、また周辺に支配地域を広げることでもできなかったオラン守備隊は、スペイン人に「モーロ人」(moros)と総称されていた、周辺のアラブ・ベルベル系ムスリム諸部族に必需物資の多くを依存せざるを得なかった¹⁷。

13 この点に関しては、Miguel Ángel de Bunes Ibarra, *La imagen de los musulmanes y del Norte de África en la España de los siglos XVI y XVII. Los caracteres de una hostilidad*, Madrid: CSIC, 1989およびMas, *op.cit.* が詳しい。

14 Beatriz Alonso Acero, *Orán-Mazalquivir, 1589–1639: una sociedad española en la frontera de Berbería*, Madrid: CSIC, 2000および“Orán, ciudad de frontera”, in Ismet Terki-Hassaine, Emilio Sola Castaño, Alejandro R. Díez Torre & Manuel Casado Arboniés (eds.), *Las campanas de Orán, 1509–2009. Estudios en homenaje a Fatma Benhamamouche*, Alcalá de Henares: Universidad de Alcalá, 2012, pp. 67–88. なお同時代の文献としては、1577年から1604年までオラン駐屯兵をつとめたディエゴ・スアレス・モンタニェス (1552–1623?) によるオラン年代記『最後のモンテサ騎士団長とその弟ドン・フェリペ・デ・ボルハの歴史。アフリカのトレムセンとテネスの王国にあるオランとマサルキビルの要塞を二人がその地の総司令官として続けて統治した手腕がここで語られる』が最も重要である(生前には出版されず、完全版が出版されたのは21世紀に入ってからである。Diego Suárez Montañés, *Historia del Maestre último que fue de Montesa y de su hermano don Felipe de Borja. La manera como gobernaron las plazas de Orán y Mazalquivir, reinos de Tremecén y Ténez, en África, siendo allí capitanes generales, uno en pos del otro, como aquí se narra*, ed. Miguel Ángel de Bunes Ibarra & Beatriz Alonso Acero, Valencia: Institució Alfons el Magnànim, 2005)。スアレス・モンタニェスは、モーロ人がオランのスペイン人に決闘を挑むことが実際に起こっていたと証言している(*ibid.*, pp. 438–440)。

15 Mas, *op.cit.*, II, pp. 424–426; Bunes Ibarra, *op.cit.*, p. 150.

16 Alonso Acero, *Orán-Mazalquivir, 1589–1639*, p. 421.

17 Alonso Acero, “Orán, ciudad de frontera”, pp. 69, 74–76; *Orán-Mazalquivir, 1589–1639*, p. 249.

北アフリカのモーロ人たちからみれば、スペイン人もトルコ人も、ともに外来の侵入者であったが、軍事技術の面では、騎兵が主体で銃火器に乏しいこれらモーロ人諸部族は、強力な火力を備えたスペイン軍やオスマン軍に対し脆弱であった¹⁸。それゆえ、一部の例外——スペイン人によって「クコ王国」(reino de Cuco)、「アラベス王国」(reino de Alabez)と呼ばれたカビル地方(アルジェ東方の山岳地帯)の二つのベルベル系部族連合は、やはりスペインとアルジェのあいだで揺れ動いたが、高いレベルの軍事力を持ち、どちらにも朝貢することなく、どちらかの同盟者として行動した¹⁹——を除き、彼らはアルジェのトルコ人かオランのスペイン人か、どちらかに臣従し朝貢せざるを得ない状況にあった。

こうした要因の結果として、アルジェとオランの周辺に位置するアラブ・ベルベル系諸部族とオラン守備隊の関係は、複雑かつ流動的なものとなった。

これら諸部族は、オランのスペイン人たちによって、オランに服属・協力して朝貢料として守備隊に物資・食糧を供給する「平和のモーロ人」(moros de paz)と、アルジェのオスマン勢力つまりトルコ人に服属・協力して朝貢する「戦争のモーロ人」(moros de guerra)に大別されていた²⁰。オラン周辺の「平和のモーロ人」は、オランへの重要な食糧・物資供給源であり、オランへ自主的に貢納するかわりに、アルジェの軍事的脅威から保護された。彼らにはオラン総督により、期限付きの安全通行許可証が与えられた。一方、「戦争のモーロ人」には、オランのスペイン軍が掠奪遠征をおこなったが、それもやはり軍事的側面にとどまらず、オランへの物資・食糧の補給手段という側面を持っていた。だが、「平和のモーロ人」と「戦争のモーロ人」というこの区別は固定的なものではなく、多くの部族はこの二つの立場のあいだで揺れ動いていた。オランとアルジェ——それぞれがより多くのモーロ人たちを自陣営に取り込もうと工作していた——のどちらに味方するかは、その時々状況しだいで変わった。「平和のモーロ人」になったり「戦争のモーロ人」になったり、立ち位置の定まらない部族も多かったのである²¹。

以上述べてきたように、アルジェとオランは宿敵同士であったが、両者の周辺に居住するアラブ・ベルベル系諸部族の姿勢は一定せず、オラン守備隊との関係は複雑であった。同じムスリムとは言え、16-17世紀の歴史的状況のなかでは、アルジェとオランの周辺に居住す

18 John B. Wolf, *The Barbary Coast: Algiers under the Turks, 1500 to 1800*, New York: Norton & Company, 1979, p. 111; Bunes Ibarra, *op.cit.*, pp. 105-106, 108-109; Andrew C. Hess, *The Forgotten Frontier: A History of the Sixteenth-Century Ibero-African Frontier*, Chicago: The University of Chicago Press, 1978, pp. 19-25, 58.

19 Alonso Acero, *Orán-Mazalquivir, 1589-1639*, pp. 444-450.

20 この2種類のモーロ人については、*ibid.*, pp. 249-278に詳しい。

21 オスマン帝国の北アフリカ支配の中心であるアルジェの総督にとってみても、イスラーム信仰の共通性という点ではオランのスペイン人よりも有利な立場にあったものの、周辺のムスリム諸集団の忠誠を確保することは、やはり容易ではなかった (Wolf, *op.cit.*, pp. 67-69, 108-111; Hess, *op.cit.*, p. 159)。

るアラブ・ベルベル系諸部族つまりモーロ人と、アルジェのトルコ人を、同一のレベルで扱うことはできない。そしてセルバンテスの『勇ましいスペイン人』もまた、彼らを一元的に描いてはいないのである。

3. 『勇ましいスペイン人』のムスリム人物たち

前節で述べたように、スペイン人の拠点オランとトルコ人が支配するアルジェの周辺には、立ち位置が曖昧で、単独では無力なアラブ・ベルベル系諸部族が存在した。セルバンテスの戯曲『勇ましいスペイン人』²²も、この歴史的な現実を踏まえ、登場するムスリムたちを細かく描き分けている。以下、この戯曲に登場するムスリム人物たちを分析し、このことを実証したい。

『勇ましいスペイン人』には多数のムスリムが登場するが、彼らはアルジェのトルコ人を代表するアルジェ王（オスマン帝国のアルジェ総督は、当時のスペイン人には一般に「王」(rey)と呼ばれていた)ハッサン（テキスト中の表記は Azán）、トルコ人の同盟者であるクコ王とアラベス王、アルジェに服属するアラブ・ベルベル系の「戦争のモーロ人」であるアリムセルとアルラハおよび彼女の率いる部族民たちの3種類に描き分けられている。これは本稿第2節で示した歴史的現実に沿っている。

戯曲全体のストーリー進行のうえで、キリスト教徒の主要登場人物たちと密接に関与して、個人レベルで最も重要な役割を果たすのは、アルラハとアリムセルである。アルラハの率いる部族民がキリスト教徒を捕えて虜囚としていること、オランの守備隊に宿営地を襲撃されていること、アルジェからのオラン遠征軍に協力することから、彼らがオランに敵対しアルジェに協力する「戦争のモーロ人」に属していることがわかる。だが、この二人はスペインの前哨基地オランとオスマン帝国の前哨基地アルジェのあいだの対立と戦争という大きな軍事的・政治的背景のなかでは、アルジェ王やクコ王、アラベス王の陰に隠れ、小さな役割しか果たさない。そのことをみていこう。

まず、オスマン勢力に与しているとは言え、オランから遠征してきた少数の兵士たち²³に宿営地を蹂躪されてしまうことから明らかなように、アルラハの一角は単独では無力であり、オランのスペイン人に軍事的脅威を与えるような存在ではない。そのことは、捕えたキ

22 『勇ましいスペイン人』の参照・引用にあたっては、Miguel de Cervantes Saavedra, *El gallardo español. La casa de los celos (Obra completa 13)*, ed. Florencio Sevilla Arroyo & Antonio Rey Hazas, Madrid: Alianza, 1997を使用した。引用箇所を示すさいは GE という略称を用い、論文筆者による日本語訳の直後に (GE, 行数) で該当箇所を示す。[] は論文筆者による補足を示す。

23 宿営地の包囲を勧めるナコルに対し、遠征隊の指揮官グスマン (Guzmán) は、それだけの兵力は持っていないと述べている (GE, vv. 1671-1674)。

リスト教徒虜囚たちへの対応にも示されている。

アルラハは劇の最初から元オラン兵オロペサ (Oropesa) を虜囚としており、そこにさらに、偽装したドン・フェルナンド、スペインで修道院にいるときにドン・フェルナンドの噂を聞いた伝聞だけで恋に落ち、彼に会うために男装して兵士としてオランにやって来たマルガリータと、彼女を追って来たその兄フアン (Juan) が加わるが、ドン・フェルナンドとマルガリータはそれぞれ自発的にアルラハの宿営地に投降し (マルガリータはオラン兵による宿営地襲撃に参加して投降する)、フアンはアルジェの軍船に捕えられたあと、アルジェ王からアルラハに贈られる。アルラハの一族は積極的にキリスト教徒狩りをおこなっているわけではないし、キリスト教徒虜囚たちに過酷な強制労働をさせているわけでもなく、その扱いは人間的なものである。16-17世紀のスペインにおいては、同時代のアルジェなど北アフリカ諸都市におけるキリスト教徒スペイン人の虜囚生活が深刻な問題として扱われ、その過酷さが強調されるのが常であったが²⁴、アルラハのもとでのキリスト教徒たちの虜囚生活は、それとは大きく異なるものとして描かれている。

また、アルラハの部族は、最後のオラン攻防戦でムスリム側部隊に協力するものの、その主力を構成するわけではなく、戦闘において重要な役割は果たしていない。

オラン攻略軍におけるアルラハの部族の主な役割は食糧の補給であり、これに関してはアルラハ本人がアルジェ王たちに対して詳しく述べている。「混ぜ物のない白パン100籠、取れたての蜂蜜の甕30、大小の家畜の群れをほぼ丸ごと、あなた方に差し上げましょう。革袋に入った甘いミルクと、酸味のあるヨーグルトも」(GE, vv. 2159-2164)。それに対し、彼女が戦闘員として提供するの、アリムセルと、ムスリム側に寝返ったふりをしているドン・フェルナンドだけである (GE, vv. 2464-2465)。最終的にはドン・フェルナンドがムスリム側から離反しオラン守備隊の側に復帰するため、アリムセルが単身戦闘に参加することになる。

さらに、アルラハは、アルジェ王ハッサン・パシャやクコ王、アラバス王と劇中で面会するが、女性であるがゆえ戦闘には参加しない。その会見の場面で、王たちが広い視野で軍事行動を考えている (後述) のに対し、アルラハが期待するのは自分の率いる宿営地がオランの兵士たちから受けた被害に対する復讐だけである。「私はこの日をきわめて幸福な日とみなすでしょう。わが宿営地が修復され、その略奪者どもが罰せられるのを見届けるという期待が、今日実現するのですから」(GE, vv. 2155-2158)。

アリムセルがオラン攻略軍の指揮官たちと会話する場面も一切なく、彼がオラン包囲戦に

24 Mas, *op.cit.*, II, pp. 375-377; Ellen G. Friedman, *Spanish Captives in North Africa in the Early Modern Age*, Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1983, pp. 55, 73; Bunes Ibarra, *op.cit.*, pp. 145-184.

参加する動機も、ドン・フェルナンドと一対一で戦う機会を求めてのことである。ナコルに従って決闘場所から引き揚げるさい、アリムセルは言う。「そなたの言う今度の包囲戦で、私はこの場でできなかったことを完遂することができるだろう」(GE, vv. 527-529)。実際の戦闘でアリムセルは、剣を交えることになったドン・フェルナンドに打ち負かされて早々と姿を消してしまい、アルジェ王が遠征軍の退却を命じる場面にはもはや登場しない。このように、ムスリム側の主人公アリムセルとアルラハは、オランを攻撃するムスリムの軍勢のなかでは、周縁的存在にとどまるのである。

一方、オラン攻略軍の主力となるのは、アルジェ王ハッサン——アルジェを征服してオスマン帝国の臣下となり、スペイン本土・船舶に対する私掠活動や北アフリカのスペイン領諸都市への攻撃によりスペインに甚大な被害を与え、「バルバロッサ」という名とともにスペイン人の記憶に深く刻み込まれていたハイレッティン・バルバロス (Hayreddin Barbaros, 1466?/1483?-1546)²⁵の子——の率いるアルジェのトルコ人部隊と、その同盟者であるベルベル系の二人の王(クコ王とアラベス王)の率いるモーロ人部隊の連合軍であり、アルジェからの部隊は主に海路到着してモーロ人部隊と合流することになっている。

注目すべきは、この作品では、オスマン軍の大軍ぶり、オランとアルジェの双方の指揮官のスケールの大きさとライバル関係が強調され、それが間接的に、オスマン軍のなかでのアリムセル、アルラハの周縁性をいっそう際立たせていることである。

そのことを示すのが、二重スパイとしてムスリム側の動向をオラン総督に、オラン側の動向をアルジェ王らに伝える、(キリスト教からイスラームへの)改宗者バイラン (Bairán)の言葉である。彼は、オラン総督に対し、ムスリム側部隊の構成を次のように細かく説明し、その大軍ぶりを強調している。

バルバロッサの息子はアラベス王およびクコ王と申し合わせており、王たちは彼を支援するために、満天の夜に現れる星よりも多くのモーロ人を与え提供しているのです。トルコ人は6千、水兵は7千、いずれも敗北を知らぬ者どもです。26隻のガレー船があり、途切れることなく補給を続けるには十分です。(GE, vv. 1879-1886)

この大規模なオラン攻略軍を率いるアルジェ王、アラベス王、クコ王は、当然ではあるが、今回の軍事行動を広い視野から考えている。また彼らの言葉からは、オランとアルジェ、それぞれの統治者の2世代にわたるライバル関係を読み取ることができる。3人の指

25 ヨーロッパ側文献では主に、「赤髭」を意味するイタリア語に由来する「バルバロッサ」(Barbarossa, スペイン語では Barbarroja) という名で呼ばれている。「バルバロス」は「バルバロッサ」がなまってオスマン側に取り入れられた綽名である。

揮官たちは二重スパイのバイランを通してスペインからの増援部隊の動向を知り、また現在のオラン総督の父をハッサンが敗死させた史実（1558年）にも言及する。

バイラン　ドン・フランシスコ〔オラン総督の義兄弟〕が〔中略〕大勢の兵士を集め、この町を救おうとしております。もう一人の卓越した、名高く幸運に恵まれた騎士ドン・アルバロ・デ・バサン〔スペインの海軍提督〕は、4隻のガレー船を指揮下に持っております。彼こそが閣下の意図の妨げとなるに違いありません。

ハッサン　わしはもうオランの砂を踏んでおるぞ。そなたのいう勢いはオランからは感じとれぬが。もうただだ喇叭を鳴らしたくてたまらぬ、わしに抵抗するのはどうか、確かめたいのじゃ。

アラベス　父を打ち負かした者は子をも打ち負かすであります。おお偉大なるハッサンよ！　攻撃を。(GE, vv. 2430-2443)

このように、『勇ましいスペイン人』において、オラン攻撃軍を主導するのは、トルコ人たちとその同盟者たるクコ王、アラベス王らであり、「戦争のモーロ人」に属するアリムセル、アルラハらの部族は周縁的存在にとどまるのだが、アリムセル、アルラハたちが同じムスリムであるトルコ人たちに深い同胞愛を抱いているかどうかは疑問である。オランのキリスト教徒たちによる襲撃の直後、オラン攻略軍がアルラハの宿営地の近くに差しかかると、アリムセルはこの軍勢を「トルコ人」と呼び、自分たち「モーロ人」とは区別している。「聞くのだ、小喇叭の音が聞こえる、トランペットと太鼓の音が聞こえる。これはオランに向け行軍するトルコ人の一隊だ」(GE, vv. 2103-2106)。

さらにアルラハの配下のモーロ人たちは、アルジェからの遠征軍に協力する一方で、彼らによる略奪を恐れてもいる。「美しきアルラハよ、キリスト教徒が残したものを、通過する10の部隊が奪い尽くすのを避けたいなら、守りにいらしてください。貴女がいれば、太陽の動きを止めることも武器を収めさせることもできるでしょう」(GE, vv. 2107-2111)。ここでも、弱体であるがゆえスペイン人とトルコ人の双方に対しおびえる、「戦争のモーロ人」としてのアルラハの部族の周縁的な立場が示されている。

以上のように、当時の歴史的現実に沿って、セルバンテスは『勇ましいスペイン人』に登場するムスリム人物たちを細かく描き分けている。それはもちろん、第一義的には、真実性を追求するがゆえのことであろうが、しかし理由がそれだけにとどまるわけではないように思われる。そこには、アリムセル、アルラハというムスリム人物たちとドン・フェルナンドを筆頭とするキリスト教徒人物たちの人間的交流を、当時の読者や観客に受け入れさせるための戦略を見出すことができる。それを次節で論じたい。

4. キリスト教徒とムスリムの友情

この戯曲では、ドン・フェルナンドやオランのその他のキリスト教徒スペイン人たちと、モーロ人アリムセル、アルラハが、キリスト教とイスラームという信仰の違いを超えて、友情を取り結ぶ点が注目に値する。

ドン・フェルナンド以外のキリスト教徒人物たちも、ムスリム人物たちに対し親密にふるまう。マルガリータはアルラハに自分の身の上を明かして親密になるし、ドン・フェルナンドの友人グスマンは、ドン・フェルナンドが決闘に応じるという旨をアリムセルに伝えたさい、次のような別れの挨拶を交わす。

グスマン アリー [アリムセル] よ、そなたのマホメットのご加護があらんことを。
アリムセル そなたのキリストのご加護があらんことを。(GE, vv. 475-476)

だが、最も目を引くのは、主人公ドン・フェルナンドがムスリムたちとのあいだに取り結ぶ友情である。先述のように、ドン・フェルナンドはアリムセルからの決闘の呼びかけに応じるためにオラン守備隊を出奔し、決闘が流れたあとは、アルラハの宿営地に偽名で投降して自ら虜囚となる。宿営地で彼はアリムセルに、その場にいないことになっている自分ドン・フェルナンドとの決闘を実現させてやると約束するのだが、そのさい二人は次のような会話を交わす。

アリムセル キリスト教徒は敵ではない。戦いの相手なのだ。美しいアルラハのみずみずしい願いが、この戦いに声と意図と手を貸してくれる。

ドン・フェルナンド ただちにそなたを彼と会わせよう。このことで私を信じて欲しい、礼節あるアリムセルよ。忠実な友にふさわしいことをそなたのためにしようとさえ思っている。なぜなら、我々の友情を隔てる信仰は、私が高貴な心を示す妨げとはならないからだ。[中略]

アリムセル マホメットのご加護がそなたにあらんことを。可能な限りのものをそなたに与えられんことを。(GE, vv. 1035-1054)

さらに、先述のように、オラン守備隊の兵士たちがアルラハの宿営地を襲撃したさいには、ドン・フェルナンドはムスリム側に立って戦う。そして彼はそのさい、ためらうことなくターバンを頭に巻く。「アリー [アリムセル]、剣とターバンをくれ。頭を守れるように」

(*GE*, vv. 1648–1650)。

オランに軍事的脅威が迫るなかでこのような行動をするドン・フェルナンドが、キリスト教徒スペイン人としての模範性をオランの仲間たちに疑われるのは、自然な流れである。

出奔した彼に対し、オランの将兵たちは、何よりもまず、イスラームへの改宗の疑いをかける。ロブレド (Robledo) という兵士は他の兵士に言う。「彼は改宗をしに行ってしまったのだ、そうでなくても、このような時に砦を去るとは、ひどいことをしたものだ」(*GE*, vv. 1065–1072)。

宿営地襲撃の予兆となる夢を見ておびえるアルラハに対し、ドン・フェルナンドは彼女の側に立って戦うことを約束するが (*GE*, vv. 1623–1640)、それを聞いたキリスト教徒虜囚オロペサ——元オラン兵である彼は、ドン・フェルナンドの偽装をすでに見破っている——は次のように独白する。「ドン・フェルナンドは狂っているか、すでにキリスト教徒の敵となっているか、どちらかだ。キリスト教徒に対して戦うことを誓うとは」(*GE*, vv. 1641–1644)。

宿営地襲撃のさい、ドン・フェルナンドは友人グスマンに変装を見破られ、ムスリム側で戦っていることを、「もうキリストの敵となったのか？」(*GE*, v. 1750)「なぜキリストに対し剣を抜くのだ？」(*GE*, vv. 1752–1753)と詰問される。それに対し「私はキリスト教徒だ、疑わないでくれ」(*GE*, v. 1757)と答えるドン・フェルナンドは、最後の決戦にはせまじオラン防衛に貢献することによって、オランの仲間たちのすべての疑いを晴らす。

このようにドン・フェルナンドは、オランのキリスト教徒の仲間たちの疑念を招きつつも、可能な限りムスリムたちと交流し友情を深める。それは、レコンキスタ時代のスペインにおけるキリスト教世界とイスラーム世界の境界 (frontera) において、軍事衝突の一方で存在した交流と相互理解の精神を、北アフリカに移し替えたものだという、カラスコ・ウルゴイティヤサンチェス・ガルシアらの先行研究²⁶は妥当だと思われる。

だが、決闘に応じるという個人的名誉のために出奔し、決闘が流れたあともアルラハの宿営地に潜入して滞在するというドン・フェルナンドの行動が、オラン防衛という集団的義務を、一時的にせよないがしろにしたものであることも確かである。ドン・フェルナンドが最終的にオラン防衛戦に貢献することで個人的名誉と公的義務を何とか調和させている点は、先行研究において指摘されている²⁷が、両者の危うい均衡を成り立たせている要素はそれだけではない。彼が交流するムスリムたちが、レコンキスタ時代のイベリア半島でキリスト教徒と長期にわたり接触していたムスリムたちと同じくアラブ・ベルベル系のモーロ人であり、しかもオランを攻撃するムスリムの軍勢のなかで最も重要度が低く周縁的な存在だという設定にすることによって、オランに脅威が迫るなかでのドン・フェルナンドの異教徒との

26 本稿18–19頁および注11参照。

27 本稿18頁および注9参照。

交流が、オランの将兵にとって、そして当時の受容者にとって、最大限受け入れやすくなっているということが指摘できる。先述のように、この戯曲において、「戦争のモーロ人」に属するアルラハやアリムセル、さらにアルラハの率いる部族民は、私掠活動によってスペイン人の憎悪の対象となっていたアルジェのトルコ人たちとは区別され、かつ距離を置いて描かれており、キリスト教徒スペイン人ドン・フェルナンドとの交流を当時の受容者に抵抗なく受け入れさせることのできる存在だったと思われる。

結末では、戦いの終わったあと、アルラハとアリムセルがドン・フェルナンドに導かれてオラン守備隊のもとを訪れ、キリスト教徒たちの前で結婚の誓いを交わすが、これも、彼らがオラン攻撃軍のなかで脇役だったという経緯から、オランの将兵たちにとっても、当時の受容者にとっても、受け入れやすくなっているであろう。

劇全体を通して、オランとアルラハの宿営地のあいだで揺れ動くドン・フェルナンドの行動は流動的である。だが、彼が人間的に交流するアリムセルとアルラハを、トルコ人ではなく、オランのスペイン人とアルジェのトルコ人が正面から対峙するなかで曖昧な立ち位置にいた、かつレコンキスタ以来、キリスト教徒スペイン人との長い接触の歴史を持つアラブ・ベルベル系ムスリムに属する、「戦争のモーロ人」だという設定にすることによって、ドン・フェルナンドの行動の流動性は、当時の受容者にとり、受け入れられるものとなっていると考えられる。

5. 結 び

キリスト教世界とイスラーム世界のあいだを行き来するキリスト教徒スペイン人ドン・フェルナンドの姿、そしてムスリムのアリムセル、アルラハと彼の交流を通して、宗教の違いを超えて相互理解や友情が可能だというメッセージをこの戯曲が発しているのは間違いないであろう。だがそれは、当時の北アフリカの現実に関する精緻な知識に基づいて巧妙に組み立てられたストーリーを通して発せられたメッセージなのである。

参 考 文 献

- Albuiséch, Lourdes, “«Mezclar verdades con fabulosos intentos»: metateatro y aporía en *El gallardo español* de Cervantes”, *Anales Cervantinos*, 36 (2004), pp. 329–344.
- Alonso Acero, Beatriz, *Orán-Mazalquivir, 1589–1639: una sociedad española en la frontera de Berbería*, Madrid: CSIC, 2000.
- , “Orán, ciudad de frontera”, in Ismet Terki-Hassaine, Emilio Sola Castaño, Alejandro R. Díez Torre & Manuel Casado Arboniés (eds.), *Las campanas de Orán, 1509–2009. Estudios en homenaje a Fatma Benhamamouche*, Alcalá de Henares: Universidad de Alcalá, 2012, pp. 67–88.

- Bunes Ibarra, Miguel Ángel de, *La imagen de los musulmanes y del Norte de África en la España de los siglos XVI y XVII. Los caracteres de una hostilidad*, Madrid: CSIC, 1989.
- Canavaggio, Jean, *Cervantès dramaturge. Un théâtre à naître*, Paris: Press Universitaires de France, 1977.
- Carrasco Urgoiti, María Soledad, “El gallardo español como héroe fronterizo”, in Antonio Bernat Vistarini (ed.), *Actas del Tercer Congreso Internacional de la Asociación de Cervantistas, Cala Galdana, Menorca, 20–25 de octubre de 1997*, Palma: Universitat de les Illes Balears, 1998, pp. 571–581.
- Casalduero, Joaquín, *Sentido y forma del teatro de Cervantes*, Madrid: Aguilar, 1951. Madrid: Gredos, 2ª ed., 1974.
- Cervantes Saavedra, Miguel de, *El gallardo español. La casa de los celos (Obra completa 13)*, ed. Florencio Sevilla Arroyo & Antonio Rey Hazas, Madrid: Alianza, 1997.
- Cotarelo y Valledor, Armando, *El teatro de Cervantes. Estudio crítico*, Madrid: Tipografía de la Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos, 1915.
- De Armas, Frederick A., “Los excesos de Venus y Marte en *El gallardo español*”, in Manuel Criado de Val (ed.), *Cervantes. Su obra y su mundo. Actas del I Congreso Internacional sobre Cervantes*, Madrid: EDI-6, 1981, pp. 249–259.
- Friedman, Edward H., *The Unifying Concept: Approaches to the Structure of Cervantes’s Comedias*, York, South Carolina: Spanish Literature Publications Company, 1981.
- Friedman, Ellen G., *Spanish Captives in North Africa in the Early Modern Age*, Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1983.
- Gerli, E. Michael, “Aristotle in Africa: History, Fiction, and Truth in *El gallardo español*”, *Cervantes*, 15.2 (1995), pp. 43–57.
- Hess, Andrew C., *The Forgotten Frontier: A History of the Sixteenth-Century Ibero-African Frontier*, Chicago: The University of Chicago Press, 1978.
- Hughes, Gethin, “*El gallardo español*: A Case of Misplaced Honour”, *Cervantes*, 13.1 (1993), pp. 65–75.
- Kartchner, Eric J., “Dramatic Diegesis: Truth and Fiction in Cervantes’s *El gallardo español*”, *Yearbook of Comparative and General Literature*, 47 (1999), pp. 25–35.
- Marrast, Robert, *Miguel de Cervantès dramaturge*, Paris: L’Arche, 1957.
- Mas, Albert, *Les turcs dans la littérature espagnole du Siècle d’Or (Recherches sur l’évolution d’un thème littéraire)*, 2 vols., Paris: Centre de Recherches Hispaniques, 1967.
- McCrary, Donald P., *No Ordinary Man: The Life and Times of Miguel de Cervantes*, London: Peter Owen, 2002.
- Rodríguez Salgado, María José, “‘El león animoso entre las balas’: Los dos cercos de Orán a mediados del siglo XVI”, in Miguel Ángel de Bunes Ibarra & Beatriz Alonso Acero (eds.), *Orán. Historia de la Corte Chica*, Madrid: Polifemo, 2011, pp. 13–54.
- Sánchez García, Encarnación, “La frontera africana hispánica y *El gallardo español* de Miguel de Cervantes”, in Ismet Terki-Hassaine, Emilio Sola Castaño, Alejandro R. Díez Torre & Manuel Casado Arboniés (eds.), *Las campanas de Orán, 1509–2009. Estudios en homenaje a Fatma Benhamamouche*, Alcalá de Henares: Universidad de Alcalá, 2012, pp. 363–376.
- Sevilla Arroyo, Florencio & Antonio Rey Hazas, “Introducción”, in Miguel de Cervantes Saavedra, *El gallardo español. La casa de los celos (Obra completa 13)*, Madrid: Alianza, 1997, pp. XII–XXX.
- Stapp, William A., “*El gallardo español*. La fama como arbitrio de la realidad”, in Manuel Criado de Val (ed.), *Cervantes. Su obra y su mundo. Actas del I Congreso Internacional sobre Cervantes*, Madrid: EDI-6, 1981, pp. 261–272.
- Suárez Montañés, Diego, *Historia del Maestre último que fue de Montesa y de su hermano don Felipe de Borja. La manera como gobernaron las plazas de Orán y Mazalquivir, reinos de Tremecén y Ténez, en África, siendo allí capitanes generales, uno en pos del otro, como aquí se narra*, ed. Miguel Ángel de Bunes Ibarra & Beatriz Alonso Acero, Valencia: Institució Alfons el Magnànim, 2005.
- Wolf, John B., *The Barbary Coast: Algiers under the Turks, 1500 to 1800*, New York: Norton & Company, 1979.
- Zimic, Stanislav, *El teatro de Cervantes*, Madrid: Castalia, 1992.

Summary

The Representation of Muslims in Cervantes' *El gallardo español*

Yasuhiro Mikura

This study analyzes, in a historical context, how Miguel de Cervantes (1547-1616) depicted Muslim characters in his play *El gallardo español* [*The Gallant Spaniard*], published in the 1615 volume *Ocho comedias y ocho entremeses nuevos, nunca representados* [*Eight New Plays and Interludes, Never Performed*].

In this play, the Christian protagonist don Fernando de Saavedra, a brave and famous soldier of the Spanish garrison of Oran, temporarily deserts Oran and develops sympathetic relationships with the two Moorish protagonists, Alimuzel and Arlaxa, on the eve of the historic 1563 Ottoman assault on Oran. The author, in line with the contemporaneous situation of North Africa, distinguishes between three types of Muslims. These are: the Ottoman Turks of Algiers, archenemy of the Spaniards of Oran; the Moors of the independent kingdoms of Cuco and Alabez, allies of the Turks; and the weak and vacillating Moorish tribesmen, who have to be subject to either the Spaniards or the Turks for their own survival. Alimuzel and Arlaxa belong to the third group.

Although Alimuzel and Arlaxa support the Ottoman assault on Oran, under the command of Hassan, king of Algiers, and the kings of Cuco and Alabez, they have only a marginal role in the assault. This seems to have enabled readers of the day to accept the friendship between don Fernando, the Christian hero, and the two Moorish protagonists.